

今日よりいいアースへの学び

ESD 持続可能な開発のための教育

(ESD:Education for Sustainable Development)

ESD とは

ESD は、Education for Sustainable Development の略で「持続可能な開発のための教育」と訳されています。

現在、世界には、環境・貧困・人権・平和・開発といった様々な地球規模の課題があります。

ESD とは、地球に存在する人間を含めた命ある生物が、遠い未来までその営みを続けていくために、これらの課題を自らの問題として捉え、一人ひとりが自分にできることを考え、実践していくこと

(think globally, act locally) を身につけ、課題解決につながる価値観や行動を生み出し、持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動です。

つまり、ESD は持続可能な社会づくりの担い手を育む教育です。

ESD の考え方

ESD の学習や活動で取り上げるテーマ・内容は必ずしも新しいものではありません。むしろ、それらを ESD という新しい視点から捉え直すことにより、個別分野の取組に、持続可能な社会の構築という共通の目的を与え、具体的な活動の展開に明確な方向付けをするものです。また、それぞれの取組をお互いに結びつけることにより、既存の取組の一層の充実発展を図ることを可能にします。

ESD で育みたい力



- 持続可能な開発に関する価値観（人間の尊重、多様性の尊重、非排他性、機会均等、環境の尊重等）
- 体系的な思考力（問題や現象の背景の理解、多面的かつ総合的なものの見方）
- 代替案の思考力（批判力）
- データや情報の分析能力
- コミュニケーション能力
- リーダーシップの向上

ESD の歩み・・・「国連持続可能な開発のための教育の 10 年」

1992 年にリオ・デ・ジャネイロで行われた「環境と開発に関する国連会議」（国連地球サミット）では、「持続可能な開発」が中心的な考え方として「環境と開発に関するリオ宣言」や「アジェンダ 21」に具体的に示され、現在の地球環境問題に関わる世界的な取り組みに大きな影響を与えることになりました。その中に、持続可能な開発の実現に向けて教育が果たす役割も記されています。

その後、2002 年の「持続可能な開発に関する世界首脳会議（ヨハネスブルグサミット）」で当時の小泉総理大臣が持続可能な開発における人材育成の重要性を強調し、「持続可能な開発のための教育の 10 年」を提唱しました。これを受け、同年、国連第 57 回総会決議により、2005 年から 2014 年までの 10 年を「国連 ESD の 10 年（DESD）」とし、ユネスコが主導機関に指名されました。



今、なぜウェルビーイングが注目を集めているのか？

ウェルビーイングが注目される背景は、主に 4 つあります。1 つずつ見ていきましょう。

多様性を認める社会

近頃、「ダイバーシティ」という言葉を聞くようになった人もいるはずです。ダイバーシティとは、「多様性」という意味があり、人種や宗教、性別、ワークスタイルなどにとらわれない考え方をいいます。

グローバル化が進む今後は、さまざまな考え方やバックグラウンドを持った人とコミュニケーションをとる機会が増えていくはずです。その際に、それぞれの能力をフルに発揮させ、コミュニケーションを円滑にとるには、多様性を認めることとウェルビーイングが必要だと考えられています。

人材確保

「みずほ総合研究所」が実施した調査では、少子高齢化が進み、今から約 45 年後の日本における労働力人口は、2016 年のときと比べると約 4 割減少するという結果がでました。

さらに労働力率は 50%ほどまで低下すると見られており、2016 年と同等の数値にするには、女性の労働力を男性並みに引き上げる必要があるといわれています。

また、労働力率をアップさせるには、「病氣治療と仕事の両立」「育児と仕事の両立」「働き方改革」が必要であるという結果になりました。ここでも、ウェルビーイングの考え方が求められるようになるでしょう。

SDGs の一部に組み込まれる

「SDGs(エスディーゼーズ)」とは、持続可能な開発目標のことで、2001 年に策定されたミレニアム開発目標の後継にあたるものです。2015 年 9 月の国連サミットの採択内容に記載され、2030 年までに持続可能でより良い世界を目指すための国際目標として掲げられています。

SDGs は全部で 17 項目あり、3 つ目に「すべての人に健康と福祉を」という項目が設けられ、ウェルビーイングについて考える必要があることがわかるはずです。